

Newsletter

March 2023

<http://www.aack.info>

目次

京都大学学士山岳会梅里雪山登山隊 三十三回忌法要報告 会長 幸島司郎1	並河治さん追悼文寄稿のお願い8
今西さんの 1550 山と高丸山 斎藤清明4	四冬・四様の雪 高田 (上越市、新潟県南部) から 横山宏太郎9
追悼 並河 治さん (2022 年 12 月 3 日逝去) 「ボケさん塾」の思い出 谷口 朗6	会員動向10
	事務局だより10
	編集後記10

京都大学学士山岳会梅里雪山登山隊三十三回忌法要報告

会長 幸島司郎

当京都大学学士山岳会と中国登山協会ならびに雲南省登山協会による日中合同梅里雪山学術登山隊が 1991 年 1 月 3 日から 4 日に遭難し、日中 17 名の隊員が帰らぬ人となったことは、痛恨の極みでありました。当会では本年 1 月の満 32 年を前に、2022 年 11 月 3 日、比叡山延暦寺・横川において標記の法要を行いましたのでご報告いたします。

物故された隊員は次の方々です。

日本側：井上治郎、佐々木哲男、清水久信、近藤裕史、米谷佳晃、宗森行生、船原尚武、広瀬顕、児玉裕介、笹倉俊一、工藤俊二

中国側：宋志義、孫維琦、李之雲、王建華、林文生、斯那次里

法要は、これまでも梅里雪山登山隊に格別のご配慮をいただいていた比叡山延暦寺・横川にお願いして、元三大師堂と鎮嶺碑前で行い、そののち延暦寺会館でお斎をいただくことになりました。

おおよそ 1 年前から計画・準備してまいりまし

たが、新型コロナウイルスの感染拡大がなお続いており、その収束も見通せなかったため、やむを得ず、ご家族と関係者を中心に参加者を調整し、参加人数が多くなりすぎないように配慮して開催することになりました。そのため、法要の始めからお斎まで通しての参加人数は 30 名に限定せざるを得ませんでした。しかし、直前になりましたが笹ヶ峰会メーリングリストで法要のみの参加をご案内したところ、20 名の方々がご参加くださったため、全参加者数は 50 名となりました。

なお、当会と京都大学山岳部関係者に加え、隊員の出身母体である神戸大学山岳会と京都大学探検部からも関係者にご出席いただきました。

出席者の交通のために送迎バスを 1 台用意し、京都駅から比叡山を往復することにしました。ご都合により自家用車などで参加された方もありました。

当日は、比叡山延暦寺・横川の全面的なご協力のもと、随応院山田能裕大僧正、弘法寺清原



写真1 元三大師堂にて 前列中央は山田能裕大僧正 小林尚礼撮影



写真2 鎮嶺碑前にて 小林尚礼撮影



写真3 延暦寺会館にて 中列右から4人目は水尾寂芳権大僧正、5人目は山田能裕大僧正、6人目は梅山龍圓大僧正 小林尚礼撮影

惠光大僧正、妙行院梅山龍圓大僧正が御導師を務めてくださいました。また、禪定院水尾寂芳権大僧正には、お齋にご出席いただきました。

横川駐車場から元三大師堂へ移動し、11時30分から元三大師堂で読経と焼香ののち山田能裕大僧正のお言葉をいただきました。次いで鎮嶺碑前に移動して、読経と清原惠光大僧正からのお言葉をいただきました。その後、横川駐車場に戻り、バスで延暦寺会館に移動してお齋をいただき、15時に滞りなく行事を終えました。送迎バスは16時30分に京都駅に到着し、解散となりました。

本来、法要には皆様に広くご案内して、なるべく多くの方にご出席いただきたいところでしたが、コロナ禍によりそれは叶いませんでした。どうぞやむを得ぬこととご理解のほどお願い申し上げます。

このたびの法要を秋晴れの日、紅葉の美しい比叡山で無事執り行うことができましたのは、ひとえに比叡山延暦寺・横川の皆様方の多大なご協力によるものであり、心よりお礼申し上げます。

る次第です。

当日ご参加下さった皆様方、ありがとうございました。また、準備にご協力いただいた児玉昌裕様および以下の会員諸氏にお礼申し上げます。斎藤惇生、左右田健次、酒井敏明、岩坪五郎、横山宏太郎、永田龍、伊藤宏範、竹田晋也、中山茂樹、小林尚礼

なお、当会としては、これからも鎮魂と慰霊の心に変わりはございませんが、33回忌をもって弔い上げとさせていただきますと考えております。御高承賜りますようよろしくお願い申し上げます。最後に、あらためて日中17名のご冥福をお祈り申し上げ、ご報告とさせていただきます。

当日の経過

- 9：15 JR 京都駅八条口観光バス乗降場集合
- 11：00 比叡山・横川駐車場到着
- 11：20 元三大師堂に集合
- 11：30～12：00 本堂にて法要
- 12：30～12：50 鎮嶺碑にて読経

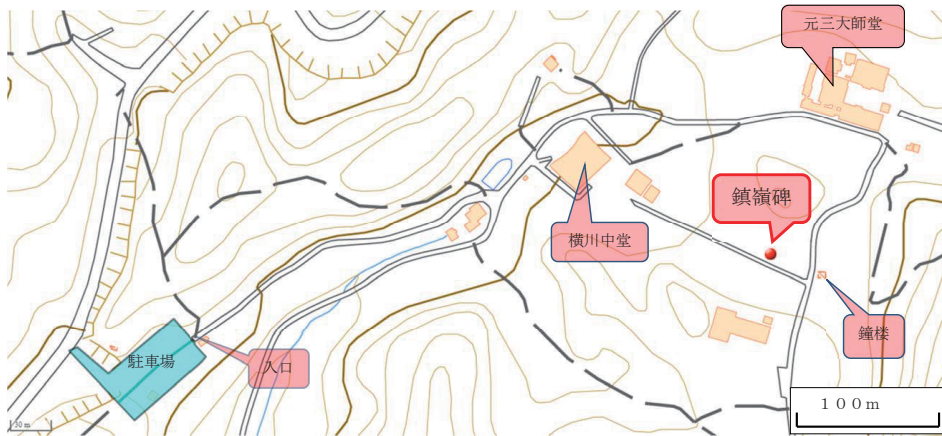
13:30 ~ 延暦寺会館にてお斎 (15:00 まで)
送迎バスにて京都駅へ
16:30 京都駅着、解散

鎮嶺碑について

「鎮嶺碑」は、梅里雪山で遭難死去された隊員の慰霊のため、比叡山延暦寺・横川に建立されました。1993年4月下旬にできあがり、開眼法要は4月25日に行われました。また、1999年4月24日には納骨法要が行われました。

横川 元三大師堂、鎮嶺碑の案内

< 図は上が北を指します >



鎮嶺碑は、横川中堂わきの階段をのぼって横川中堂正面に出てからゆるい坂を上った左手にあります。

今西さんの 1550 山と高丸山

斎藤清明

○登頂 1550 山

図書紹介していただいた拙著『今西錦司と自然』(玉川大学出版部 2022)のなかで、今西さんが生涯に国内で登った山の数を、1550山としました。これまでは、『増補版 今西錦司全集』別巻(講談社 1994)の「登頂1552山山名リスト」になって、今西さんについての著述ではずっと1552山としてきましたが、2山減らしたわけです。

今回、登頂1550山とした経緯にふれる前に、これまで1552山としていたことについて説明します。

今西さんが1992年6月15日に90歳で亡くなって間もなく、92年から93年にかけて『増補版 今西錦司全集』が刊行されました。今西さんが70歳代の1975年に完結していた『今

西錦司全集』全10巻(講談社)に、その後の著作を収めた3巻と別巻が追加されたのです。その別巻の編集に私も加わって、今西さんの年譜を編み、「登頂1552山山名リスト」も収めました(この別巻だけ、著者は今西+斎藤です)。

この山名リストは、今西さんが1985年11月3日に奈良県の白鬚岳(1378m)で達成した「日本1500山」を機に出された『千五百山のしおり』(私家版1986)をもとにして作成しました。

なお、『千五百山のしおり』よりも前に、今西さんは大峰山系の釈迦ヶ岳(1800m)での「千山登頂」(1978年8月13日)の祝賀会(9月29日)で、『一千山のしおり』(私家本)を出席者に渡しています。さらに、登頂記録を伸ばしていく度に、『千三百山のしおり』(1982年)、

『千四百のしおり』(1984年)を作成しています。

『千五百山のしおり』は、1986年4月12日に京都ホテルで催した千五百山登頂祝賀会で配布されました。1985年末までに登頂した山名を地域別に分けて、それぞれの山の三角点の種類、標高、登頂日を載せています。そして、それら登った山の数の合計を1508(1985.12.30現在)と、今西さんは記しました。今西さんが自ら編んだ登山記録の集大成といえましょう。

この「しおり」以後の1986年と87年の記録は、「1500山以後」と表記した今西さんのノートが残されています。これには、1509からの番号が付けられていて、1987年末までの44山、1552の番号で終わっています。

これらの資料をもとにして、逝去間もなくの『増補版 今西錦司全集』別巻で、「1552山」山名リストができました。

ところが、刊行後しばらくして、熱心な今西ファンから、山名リストの数が合わない、二つ山が少ないとの指摘が寄せられました。山名リストを数えると、2山少ない1550山になるということです。

その通りでした。そこで、調べ直してみると、1508山が載っているはずの『千五百山のしおり』が、二つ少なく1506山であることがわかりました。北海道から九州まで地域別に登頂数を今西さんが記してあるなかで、中部山岳地帯と京都周辺でそれぞれ1山、計2山が多くカウントされていました。どうやら、今西さんが数えちがえていたようなのです。

ということで、この度の『今西錦司と自然』では、今西さんが日本国内で登って記録に残した山の数は1550山になるとしたわけです。

なお、すでに2011年、国土地理院「地図と測量の科学館」(つくば市)で催された企画展は、「今西錦司 三角点を巡る 1550山登頂の記録」でした。これは、今西さんが登山に用いた、国土地理院(前身は陸軍参謀本部陸地測量部)の五万分の一地形図や二十万分の一地勢図など計1287枚を、逝去後に長男今西武奈太郎さんが国土地理院に寄贈され、それを披露する展示でした。

もっとも、今西さんが登頂しているのに、「しおり」の山名リストから漏れている山も幾つかあります。『初登山——今西錦司初期山岳著作集』(ナカニシヤ出版1994)を編集した際に気

づいたのですが、大峰山系の仏経ヶ岳(1915m 1923年4月9日登頂)は「しおり」には記されていますが、その山行(西堀栄三郎さんが同行)で登った弥山(1895m)と行者還岳(1546m)は載っていません。ちょうど三高山岳部をつくったところで、今西さんは記録を未発表原稿として残しましたが(『初登山』に収録)、「しおり」の山名リストにはカウントをしていません。

また、日本山岳会『山』594号(1994.11.20)の和田庄司「今西さんの登頂山名リストにもれた山」よると、岩手県遠野市の大垂水(817m)には1981年5月3日、岩手支部メンバーらと登っているのに、「しおり」に載っていないということです。

さらに、標高400m以下の山は、最晩年まで番外としてカウントしなかったもので、4山のみの記載になっていますが、他にもあるかもしれません。

今西さんの日本1550山登頂は確かな記録ですが、さらにプラスアルファがあることもまちがいないでしょう。

○幻の高丸山

今西さんは『千五百山のしおり』以後、1986年は30山に登っています。その年末の「納め山」としての秀ヶ辻山(403m、兵庫県)には私も同行しました。新興住宅地のはずれまで車道があり、その先の小高い丘にある三角点はすぐ近くでした。次男の宇治日出二郎さん一家ともども、三角点を囲んで、万歳三唱。帰路は、いつものように丹波の篠山に寄って、猪肉を求めました。

翌1987年は、85歳の今西さんにとって、山登りをした最後の年でしたが、ひと月に一回ほど、年間で13山に登っています。

1月は、その年の干支にちなんだ卯月山(1102m 長野県)。8月には流葉山(1423m 岐阜県)。その他は、車で日帰りの関西の山です。いずれも、三角点のある頂上の近くまで車で行くことができる、ゴルフ場やスキー場の付近がもっばらでした。なお、3月に西宮市の甲山(309m)に登って、それまでは400メートル以上の登山を記録するという原則を外しています。その際に、6年前に登っていた一等三角点の西山(329m 和歌山県)が記録に追加と

なりました。

8月9日は、大文字山。何度も登っていて、もちろんカウントしませんが、毎年の送り火のところに長男夫人和子さんを伴って登り、どれほど歩けるか、体力を確かめていました。そうして、12月20日、年末恒例の「納め山」として、宇治日出二郎・美津子夫妻、吉村比佐さん、高木志茂子さんの4人が同行し、高丸山(366m 兵庫県)。

この、今西さんの最後の山は、国土地理院の五万分の一図「広根」(昭和55年発行)の左下隅にあり、神戸市と西宮市の境界近くに「366.5」の三角点が記載されていました。山名は無し。

同行した高木さんによると(日本山岳会京都支部『支部だより』27号 1992年8月20日)、かつてはハイキングコースの明るい丘陵地だったのがゴルフ場に開発されて、頂上部には西宮グリーンゴルフ場のクラブハウスができていま

した。三角点を探したが見当たらず、測量標識の白いプラスチック板が残っていて、事務所で尋ねると、高丸山というが、三角点標石はもうないとのこと。今西さんはがっかりしたようだが、測量標識を確認していたそうです。

年が明けてからは犬山市の日本モンキーセンターに出かけた他は外出しなくなり、2月17日、尿道閉塞のために入院。そのまま4年4ヶ月間後の逝去でしたので、高丸山が今西さんの最後の山行となりました。

ところが、最新の地形図では、高丸山の三角点のあった場所は「363」と3メートルも低く記され、三角点の印も、もちろん高丸山の表示もありません。「幻の高丸山」のようになってしまい、約5キロ南南西にある(五万図は「神戸」)高丸山(508m 今西さんは未登頂)に、今西さんを偲んで登られる方もいるのです。

追悼 並河 治さん (2022年12月3日逝去)

「ボケさん塾」の思い出

谷口 朗

並河ボケさんは2022年2月に体調を崩され、東海大学病院に入院。検査の結果、「頸椎のすべり症」と診断された。手足とも麻痺の症状あり。その後、掛りつけ医の小田原市山近記念総合病院に入院。3月に七沢リハビリ病院に転院。9月には鶴巻温泉の介護施設に移られたが、約10ヶ月の闘病の後、12月3日に逝去された。

発症入院後、有志10数名で情報を共有し、ご家族との連絡はご長女、品田様とメールで行うことにした。斎藤Y先生には症状を詳しく報告し、その都度、適切なアドバイスを頂いた。山近病院の副院長が京大山岳部に在籍していたことが判り、同期のメンバーからの働きかけで、その後の転院などが非常にスムーズになった。しかし全ての判断は他人の入り込めない領域である。今回はコロナによる面会規制がご本人との意思疎通を極限まで難しいものとした。ご家族のご苦勞は筆舌に尽くしがたい。心からお悔やみ申し上げます。



並河治さん遺影

ボケさんとの思い出

ボケさんは学生時代の1955年、春山合宿で魚津→毛勝→猫又→剣をポーラーメソッドで往復した。卒業後の1958年には、当時未知の地域であった西北ネパールへ遠征された（川喜田二郎隊長）。われわれ山岳部同期（1957年入部）の者は、ボケさんと現役時代に山行をご一緒した者も多く、特に親しくして頂いた。20年ほど前から「ボケさん塾」と称し、ボケさんを囲む植物などの勉強会を設けた。会の前日は囲碁や料理について教わった。ボケさんの出で立ちにはネパール帽に南天の杖、真っ赤なサブザック。西北ネパールの戦友ソーニャ（曾根原恵夫氏）も時々参加され、話が弾んだ。ご専門の植物だけではなく、動物や昆虫などに注がれるボケさんの眼差しは限りなく優しいもので、人間もそれらの構成物の一つに過ぎないと考えておられたようだった。われわれは自然分野で疑問があれば、何でもボケさんにお聞きし、丁寧な見解を頂いた。その一部を以下に披露したい。

ウィルスの話

コロナウィルス感染に関連して、ウィルスについてお聞きした。「人のことではありませんが植物のことです。植物を侵すlatent virusというのがあります。このウィルスは植物に入っても、十数年間も症状が出ません。ところがこのウィルスに感染した植物に他のウィルスが入ると（混合感染）、激しい症状が表れ急速に拡がります。かつて私が関係したカノコユリの産地が、この混合感染により壊滅しました。カノコユリはウィルスに強いという神話が崩れたのです。

Latent virusはキクにも入ります。キクの栽培者は病害虫の駆除には非常に熱心で、少しでも症状の出たキクはすぐに抜き捨てます。殺虫剤・殺菌剤で徹底的に予防します。それでも何か分からないけれど、毎年さし芽で殖やして10年・20年栽培すると、花が小さくなり生育が悪くなります。栽培者はこの原因を「品種の老化」と考えますが、実はlatent virusが長い時間をかけて、徐々に悪さをしているのです。私はこれを「タタリダ」と答えます。キクの場合もlatent virusに侵されている無症状の株に、他のvirusが入った場合は混合感染となり、急に枯れるなど極端な症状が拡がります。コロナウィル

スの情報が入るたびに、人と植物を対比して考えています。」（2020年3月のお手紙より）

京都北山の鹿害

一時、京都北山の芦生演習林で下草が一斉に無くなった時期があった。鹿害である。ボケさんは以下のように考えておられたようだ。「演習林だけでなく丹波高原全域を考えて行動する必要があります。そのためには昭和25年頃からの変化を考えなければなりません。まず、人口が減り過ぎた、かつての山村が廃村に。木材が売れない。その中には薪炭需要の急落もあるでしょう。風呂暖房用木材と炭は、すべて石油製品に変わりました。この需要がどれほどか、私には分かりませんが、大変な量だと思います。話は変わりますが、京都ではかつて松の落ち葉は燃料として大切なものでしたが、プロパンガスの普及により不要になりました。落ち葉は木の下にそのままにされ、土の上の溜まった有機物に寄生したカビが生え、マツタケの菌糸は死にました。一事が万事でしょうか。山に人が入らない。山犬はいない。鹿の餌はある。殖えるのは当然です。

ヨーロッパやヒマラヤ地方では、森林放牧が普通でした。家畜が殖えすぎてヒマラヤ地方では植物相が変化し、家畜が食えない木と草ばかりが残っています。欧州の人はもう少し知恵があり、三圃制を生み出しましたが、10年以上前にスイスの高原を歩いた時には、見事に動物の食べない草ばかり残っていました。鹿の増加は過放牧と同じ変化を起こしているのでしょうか。農家の畑まで荒らされるのは自然に草（餌）が足らなくなった証です。鹿も餌が無くなれば移動するか、減るでしょう。奈良の春日神社の近辺の自然をみるとよく分かります。動物が食えない草ばかり。鹿は草が無くなり移動すると、地元の鹿と交配し雑種強勢を起こします。丹沢の鹿が良い例です。大山神社で飼っていた金華山（宮城）の鹿は宮島（広島）と山梨県の野生の鹿が交配したもので、繁殖力、耐病性が強い。」（2021年1月のお手紙より）

最近おやりになっていたこと等

「私は楽しみながら切り花用のキクの新品種を作るなど、何か農家の役に立つことが出来ないかと少しは動いています。私は今から2万年

前の低温期の植物相を調べています。シャクナゲの仲間は雲南省の原産と思われますが、東南アジア、台湾などを含め、山の上だけに隔離されたように生きています。多分2万年前には地続き（スンダランド）に広がっていたのが、温暖化により山の上だけに残ったのでしょう。ネパールの国花ラリグラス（*Rhododendron arbrium*）と同じものをスリランカの最高地で見ることがあります。

京都にも自生しているササユリは、新しく新芽が伸びてから花芽が出来ますが、福島県などにあるオトメユリ（実際は同じもの）は、新芽が伸びる前の球根の中で花芽が出来ます。植物の知恵です。人類とは関係なく、寒さは来ます。江戸時代にも寒い時期がありました。人類が起こした温暖化には人類が責めを負わねばなりません、ひょっとすれば富士山が火を吹いて気温が下がるとか、間氷期がやってくると少しは良いか、などの夢をみています。」（2021年1月のお手紙より）

ボケさんのご経歴など

- 1933 京都市生まれ。
- 1951 京都大学農学部入学 山岳部入部
- 1955 春山合宿 魚津一毛勝一猫又一剣
ポーラーメソッドで往復。

AACK Newsletter No.86 「回想 1955年3月 毛勝から剣への合宿」（酒井敏明記）

- 1958 西北ネパール遠征（川喜田二郎隊長）
AACK Newsletter No.51 「川喜田二郎さんのこと＝ボケのたわごと」（並河治記）
- 1960 大学院修了後、神奈川県庁
- 1990 神奈川県立大船フラワーセンター 園長
- 1992 JA 全農農業技術センター
- 2005 講演「雲南の山の植物」 第1回雲南懇話会
- 2007 梅里雪山遭難慰霊と雲南シャクナゲの旅
- 2010 講演「雲南省の石楠花」 第16回雲南懇話会

著書

- 校庭の花（野外観察ハンドブック）（全国農村教育協会、1995年）
- イラストでわかるバラ栽培のコツとタブー（講談社、1998年）
- 花き（JA 営農指導員テキスト、2000年）
- 暮らしの中の花—花の民俗誌（自然の中の人間シリーズ—花と人間編）（里山漁業文化協会、2004年）

など

並河治さん追悼文寄稿のお願い

皆様御承知の通り、2022年12月3日、たいへん残念なことに、並河治さんが逝去されました。並河さんを偲ぶよすがとするため、皆様からの追悼文を AACK Newsletter に特集して掲載したいと願っております。並河さんに縁の深い皆様に、ぜひ下記の要領にてご執筆いただきたく、ご協力のほど、よろしくお願ひ申し上げます。

世話人 谷口朗、山岸久雄

記

- ・掲載紙：AACK Newsletter 第105号（2023年5月発行予定）
- ・原稿分量：任意（A4版1枚弱が、Newsletter 刷上がり1頁です）

- ・原稿体裁：任意（ワープロ文書ファイル、原稿用紙でもOKです）
- ・写真：画像ファイル、または紙焼き写真（紙焼き写真は編集終了後、お返しします）
- ・追悼文の投稿を考えていただける方は、まず世話人にメールでご一報をお願いします。
谷口：
山岸：
- ・投稿締切：2023年4月16日（締切にとらわれず、早めのご投稿をお願いします）
- ・原稿送付先：編集人 横山宏太郎
電子メール：
郵送の場合：

四冬・四様の雪 高田（上越市、新潟県南部）から

横山宏太郎

Newsletter で何度か私の住む新潟県南部の雪の様子を報告してきましたが、最近四回の冬は、それぞれ違った雪の降り方でした。まず2019年から2020年の冬(2020冬、以下同様に)は高田の最大積雪深がわずか23cmという記録的な暖冬少雪でした(92号)。次の2021冬は平野部中心の豪雪で、高田の積雪は249cmにも達し、大きな影響がありました(96号、99号)。2022冬は山沿い中心の豪雪で、2023冬にはかなり珍しい雪の降り方が見られました。あとの二冬についてここで紹介したいと思います。

2022冬(図1)はラニーニャ現象が発生し、大雪の予報でした。本格的な積雪開始は12月23日、山地に近い関山(標高330m)では1週間で150cmを超えました。その後も降雪が続き、1月中旬ごろに2m、2月下旬には3mを超えました。この間、平野部の高田はずっと関山の1/3程度の積雪深で、山雪傾向が続いたことが分かります。関山よりさらに山に近い妙高高原では4mを越えたこともあり、典型的な山雪の冬でした。平野部の住民は楽でしたが、山沿いでは相当な苦労があったでしょう。

2023冬(図2)もラニーニャ現象は依然継続中で、大雪との予報でした。12月、最初の本格的な降雪で新潟県の北部・中部に雪が集中し、北部の新潟では実質2日間で一気に積雪は60cmを超え、68cmとなりました。新潟は年最深積雪の平年値が32cmですから、その2倍を越えたわけです。中部の長岡も実質2日間で積雪が100cmを超えました。これほど強い降雪があると、交通をはじめ大きな影響がでます。しかし私の住む南部には、平野部だけでなく山間部でもほとんど雪は降りませんでした。

気象庁提供の雨雲(雪雲)レーダーの画像を見ていると、高田付近では濃い雪雲が陸地にはかからず海上を東に流れて行き、新潟県中部・北部に上陸して大雪を降らせたようです。非常に珍しい降雪のパターンで、専門家もその原因を研究調査中です。

その後も降雪量は新潟県北部・中部に多く、南部に少ない傾向が続き、妙高方面のスキー場

は雪不足と報じられました。1月下旬によくまとまった降雪がありましたが、それでも関山の積雪深は平年値に達していません。今後は気温の高い傾向と予報されていますので、スキー場は早めに営業終了かもしれません。

いつも「平地は少なく山は充分という雪の降り方が理想的」と言っています。この二冬はそれに割と近かったと言えそうですが、平地住民のわがままかもしれません。

<注>

雪のデータは全て気象庁の観測データをウェブサイトからダウンロードしました。

文中の新潟、長岡、高田、関山は気象庁の観測点を指します。それぞれ、新潟市、長岡市、上越市、妙高市にあります。

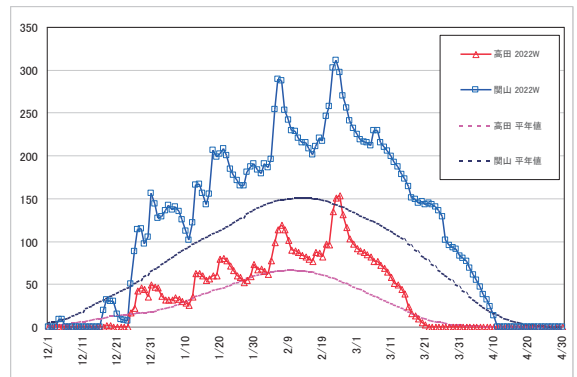


図1 高田と関山の積雪深 (cm)
2021年12月から22年4月と平年値

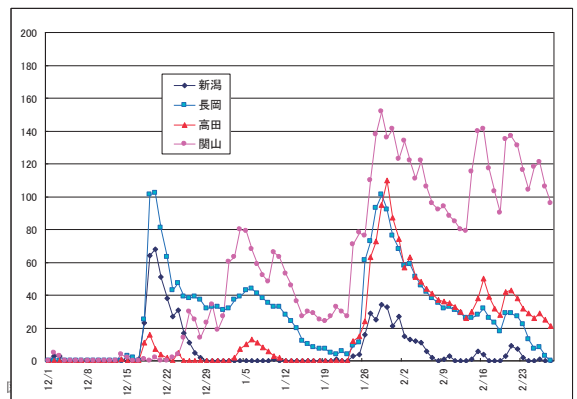


図2 新潟・長岡・高田・関山の積雪深 (cm)
2022年12月から23年2月

会員動向

訃報

奥村樹郎 2023年1月31日逝去
並河 治 2022年12月3日逝去

会員異動

仲原博夫 自宅住所変更
松本保博 自宅住所変更

事務局だより

新年を迎えもう一月が経ちますが、コロナ禍もようやく最悪期を抜け、2023年は少しは明るい世の中になりそうです。昨年の晩秋、梅里雪山三十三回忌の法要を執り行っていたいただきました比叡山延暦寺山田能裕大僧正、清原恵光大僧正、梅山龍圓大僧正、水尾寂芳権大僧正のお住まいのお寺のある坂本の里を、齋藤会員、岩坪会員、幸島会長共々、お礼参りに訪れました。抜けるような青空とお寺の真っ赤な紅葉のコントラストが鮮やかでした。新年は本会にとっても明るい年となることをお祈りしました。

編集後記

Covid19の感染拡大から3年が経ちました。皆様にはそれぞれの立場でご苦労されたことと思いますが、お元気でしょうか。私は幸いにこれまでは感染せずに過ごしてきました。

世間には「ゼロコロナ」を維持していると主張するところもあるようですが、実態はどうでしょうか。ここで「ゼロコロナ」の例をひとつご紹介します。それは、日本の南極観測隊です。日本から南極へは観測船「しらせ」（自衛艦でもあり、乗組員は海上自衛官）で行きます。最近では隊員はオーストラリアまで空路、そこで乗船していましたが、この間は日本から乗船しています。コロナ禍下の2020年11月出発の隊は乗組員も含め2週間の隔離ののち乗船し、昭和基地へ直行・直帰でした。翌年はオーストラリアの海軍基地で燃料の補給を受けただけで上陸せず、ほぼ直行直帰でした。南極観測を中断するような事態は絶対に避けたいという関係者の努力でこれまで「ゼロコロナ」が実現できているわけですが、集団が大きくなればなかなか難しいことでしょう。早くこれまで通りの活動ができるようにと願っております。

104号にご寄稿の皆様、ありがとうございます。発行が遅れて申し訳ありませんでした。
横山宏太郎

次号原稿締め切り 2023年4月16日
原稿送り先：横山宏太郎

発行日 2023年3月15日
発行者 京都大学学士山岳会 会長 幸島司郎
発行所 〒606-8501
京都市左京区吉田本町(総合研究2号館4階)
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科 竹田晋也 気付
編集人 横山宏太郎
製作 京都市北区小山西花池町1-8
株式会社倉事務所